

グローバル化資本主義の位相；どこからどこへ

海野 八尋

(金沢大学)

序

「現代資本主義の基本構造との関わりで危機の重大性の解明」という要請された課題を果たすために、①過去の経験から悲惨な結果が当然の経済的自由放任（グローバル化と新自由主義的言説）がなぜ復活し、主流となり得たのか、言い換えれば、なぜ内外のマルクス主義（左翼）と戦後民主主義（リベラル、ケインズ主義）は敗れたのか、を明らかにすることが必要である。その純粋経済学的根拠と政治経済学的根拠を、「システムと言説」の視点から述べ、②そこから導出される基本的課題を考える。

(1) 資本主義に内在する危機（繁栄）要因

1. 一般的需給不一致と「循環的危機」

資本主義は基本的には利潤に規定された生産システムである。大きな予測利潤（率・量）には高い投資計画（率・量）が、低い利潤には低い投資計画が対応する。利潤は費用と価格（需給関係）で決まる。他方、利潤が所与であれば、投資は貯蓄と投資の比率によっても左右される。予測に基づく今期投資（需要）と前期投資実績（供給）の不一致は市場の調整によって事後的に調整されながら新たな不一致を生む。自然的経済は常に需要超過か供給過剰で推移し、その不一致と方向転換は必然である。下方転換と不況は利潤獲得と労働力の再生産を困難にする「危機」である。

2. 循環・回転諸条件の充足（システム）と「構造的危機」

「商品の価値実現」という問題に加えて、中長期的には資本形態循環・回転（貨幣—商品<生産手段と労働力>…稼働生産資本…商品資本—貨幣資本）は資金、労働力（質と量）・生産手段の確保、工場での安定的協業関係、市場確保が蓄積の必要条件である。しかし、それらは所与ではない。金融、教育・科学、医療保健、都市環境、生産インフラの改革、整備が政策的に必要となる。これらが保証されないときは「構造的危機」が発生する。

3. 現実的解決

下方へ進行する経済の再逆転は原理的には技術革新で可能となる。しかし、循環的危機は現実には外国市場の獲得、領土拡張という方法で打開が図られた。構造的危機には

市場的解決策がない。産業革命（技術革新ブーム）後の長期不況は独占と帝国主義、国際競争を生み、世界大戦、ソ連の成立で一段落した。生命・資産の破壊、社会主義国・労働運動・反戦運動・民族運動の出現はこの経路の回避を要請し、1920年代の政治的「不戦システム」をもたらした。他方、国際経済関係自体は改編されず、世界経済恐慌においては緊縮、対外膨張と保護主義が再び採用され、第2次大戦、核兵器使用に至った。

（2）ブレトンウッズ体制（黄金時代）

1. 基本的性格；アメリカを基軸とした「投資の社会化」と「国家の自給」

J. M. ケインズは、需要不足を資本主義の一般的危機要因と見て、これを財政支出、管理通貨制度で補う必要と効果を理論的に示した（「投資の社会化」）。そして、アメリカの提案とケインズの協力により、アメリカ主導・依存の「**国家の自給**」（国民経済の保全と国際協調）を原理とするブレトンウッズ協定が成立し、この協定に基づくシステムと先進各国で採用された「ケインズ主義」の政策・制度が資本主義諸国の「戦後」を規定した。

「国家の自給」原理の下で、戦後世界で主導権を握った穏健なケインズ主義と社会民主主義は「投資の社会化」の主要手段である財政支出が文教福祉医療にも振り向け、労働力の発展的再生産と社会的安定が実施された。循環・回転諸条件整備にも公的資金が投下され、社会的生産手段・生活手段が整備され、需要効果だけでなく生産力と生活水準を上昇させた。それらを原理的に否定した新古典派経済学は消滅したかに見えた。

2. システム崩壊

ブレトンウッズ体制とケインズ主義は、①経済成長、②民主主義、③不戦平和をもたらした。しかし、他方でそれはもともと内在させていた世界的公共性の不全性と、そのシステムが生み出した新たな問題の解決（システムと政策の発展）に失敗した。なぜか。

この体制を支えていたのは、アメリカの、①貿易黒字、②対外債権、③金保有、④核・軍事力（冷戦体制と平和共存）であった。④以外の条件を消滅させたのは、このシステムの下で生じた①アメリカの低成長、②欧日の高成長、③アメリカの対外「援助」であった。アメリカは、債務の金による清算と競争力低下を受容せず、基軸通貨国特権を有したまま体制とケインズ主義からの離脱を図った（71年）。経済は世界的に停滞し、不安定化した。

3. 新たな問題（豊かさのはてに）

ブレトンウッズ体制とケインズ主義がもたらした成功は、新たな問題を生み出した。それは、①「大きな政府」の「制度化」、②民主主義（機会平等）の形骸化と不全、秩

序=利害関係の固定化、③「負の生産物」の巨大排出、④地域社会崩壊、⑤社会保障の相対的遅滞、⑥核兵器を軸とする冷戦・安保体制がもたらす平和・安全崩壊の危険と大国支配、⑦南北較差である。成長の配当を相対的には不十分にしか受けられない個人、性、階層、地域、国家、民族からの抗議、異議申し立て、不満、ルサンチマンと改革運動が噴出した。

さらに、システム崩壊と新保守主義がもたらした不況、雇用喪失、社会保障後退に対して崩壊過程のシステムとケインズ主義は機能せず、対抗言説によって逆に問題の原因と評価された（「制度疲労」）。

（3）代替としてのグローバル化、言説としての新保守主義・新自由主義

1. 反ケインズ主義・反ブレトンウッズ体制の形成と勝利

経済グローバリズムの本質は、地球的次元（世界市場）における企業活動の自由であり、世界的次元で循環諸条件を確保する運動である。それ自体は、ブ体制以前と同じ、排除された経済的自由放任原理に依拠している。

新保守主義・新自由主義はブレトンウッズの崩壊による状況悪化の原因をブ体制と国内制度、ケインズ主義そのものに全面的に押しつけることに成功した。ブレトンウッズ合意は放棄され、ケインズ主義的政策体系は大衆の支持の下に転換された。支配的言説になり得たキイ・ワードは、先進国に於いては「自由」である。新古典派経済学が復活した。

途上国・旧社会主義国の低賃金労働力、低地価の自由な利用は先進国企業にとって、画期的技術革新と同じ作用を果たす（予測利潤率の急上昇）。他方、ブ体制とその崩壊過程で発展が遅れた発展途上国・旧国家社会主義国の政府と企業も外資・外国技術・外国市場を利用することによって成長する可能性を見て、多国籍企業主導のグローバリズムを受容し、推進した。

世界政府権力なしで、単一の安定した世界経済と持続可能な地球環境は維持できない。国民国家、世界政府のない世界は、市場原理と内外競争に翻弄されることは必然である。「労働・福祉、金融の崩壊」がそれを端的に示す（非経済的には地球環境悪化と核拡散、パンデミック、地域紛争、社会暴動）。世界市場競争を媒介として諸条件は低位均等化する。時間は絶対であり、世界大化した市場で変動する情報、リスクの短期的な算定は困難になる。

（4）左翼的反対派の戦略、展望

ブ体制を批判してきた左翼・民主反対派のすくなからぬ部分がグローバル化を支持、受容し、その言説に同調した。ブ体制とグローバル化のシステムの相違を理解しない「混乱」から離脱し、我々はブレトンウッズ体制とケインズ主義、国家社会主義の不全と失敗及びグローバル経済の災厄と破綻から次のシステムと政策を展望する必要がある。